

The Robber Bridegroom :

南部伝説文学の中の一寓話

太田直子

I

1936年6月、近所に住んでいた Hubert Creekmore の紹介で *Manuscript* に初めての短編 “Death of a Traveling Salesman” が掲載され、Eudora Welty は作家としての一步を踏み出した。その後、彼女は *Southern Review* に短編を投稿し、1937年から1939年にかけて同雑誌に6篇の短編が掲載された。その後 Welty は、Diamuid Russel という有能なエージェントを迎え、*The Atlantic Monthly* に掲載された短編も好評で、17の短編を収めた *A Curtain of Green and Other Stories* が1941年に出版された。同年 “A Worn Path” が O. Henry 賞の二位に選ばれ、創作意欲が高まるなか、1942年に中編小説 *The Robber Bridegroom* が出版された。*The Robber Bridegroom* は、“The Wide Net” (1943) に代表される短編から初めての長編 *Delta Wedding* (1946) へのステップとして、大きな意味を持っているように思われる。*The Robber Bridegroom* は、一見、滑稽な恋愛物語と思われるが、読み重ねていくほどに、多くの批評家が指摘する “a double identity”、明と暗の共存、2重構造が存在することに気付く。

The Robber Bridegroom は、Mississippi 川流域の船着き場 Rodney と Natchez Trace を舞台としている。この Rodney という土地について、Welty 自身は、1986年の Patricia Wheatly のインタビューに次のように答えている。

Q: Would you talk about some of the places you have written about? What about Rodney?

Welty: I'd read about it in some history of Mississippi in the days when it was a port on the Mississippi River, reached only by water, of course. It was bigger than Natchez at the time. . . . there was almost nothing because the river had moved three miles away from it. It was really fascinating to find the old graveyard was stuck on a sort of shelf above the town. . . .¹⁾

Welty が、現在は川の流れの変化により、川沿い町ではなくなり、歴史の中に埋蔵された Rodney を舞台に設定し、現在の南部と異なる古き良き時代の南部を心に描いて、そこに自分の手で新しい歴史を描き始めようとしたことは、彼女が Rodney ばかりでなくもう一つの舞台

として Natchez Trace を選んだ事からも推測することができる。 *The Robber Bridegroom* を分析する前に、Natchez Trace についてその歴史を紐解く必要があると考える。

II

Natchez Trace の歴史の懐古は、そのまま南部の過去を辿ることに他ならない。ヨーロッパ人が最初、この地方に来た頃は、先住民の the Chikasaws, the Choctaws そして the Natchez というインディアン の 3 部族がそれぞれの掟とそれぞれの宗教をもって生活していた。彼等の道ともいえる獣道が幾つもあり、それがインディアン の部族間をつなげる道になっていた頃もあった。こうした獣道をフランス人が “trace” と呼び、その道が個々の重要性を増し、結び合っ て現在の Natchez (Ms) から Nashville (Tenn) へとつながったのである。

ヨーロッパ人は、この道を軍隊の政治的戦略の手段として用いた。1729年には、勇猛で礼節を重んじる Natchez 族がフランス軍 Fort Rosalie (ローザリー砦) を襲撃し、子女を含む白人を殺害したが、やがてその大反撃に会い、一族はほぼ全滅することとなった。1733年フランス人は、ようやく十分な情報を得て、正確な地図をつくりあげ、Natchez から Choctaw 族の部落よりも北へと道を進めていくが、まだその道には名前が付けられていなかった。1763年にフランスからこの地を割譲された英国人も、フランス人同様にこのインディアン の道に興味を持ち、“Path of the Choctaw Nation” と名付けた。スペインと英国が戦っている間、Kentucky 拓植民は、農産物や材木などを Natchez から New Orleans まで運び Spanish Gold に変換するために街道を利用するようになり、スペインが Natchez を領有した。1798年にスペインがこの地を合衆国に委譲した頃、現在の Mississippi 州地域の街道が “Chickasaw Trace” として整備された。1800年から1820年は、この街道の最も往来が激しい時期で、当時は郵便道路として大いに利用された。1812年戦争後、“frontier defense” の必要性が無くなり、1840年代に蒸気汽船が交通の主流となり、町と町を結ぶ直線的な道路が整備されたことで、この街道の価値は薄れ、衰退していった。

The Robber Bridegroom が発行された1942年頃、インディアンは西部へと追いやられ、彼等の残した Natchez Trace も荒れ果て、古の跡をたどるよすがもない有様になっていた。その後、当時の街道沿いに全長450マイルの Natchez Trace Parkway が整備され、車でその跡を辿っていくと街道沿いの町の様子がパネルで説明されるに至った。

Welty は、執筆当時、所々でその道程も明らかでなかった Natchez Trace の歴史物事実を遡って辿り、歴史の持つ明るさと暗さの両方を取り入れて、一つの壮大な物語を創作しようとした。*The Robber Bridegroom* を読み進めていくと、彼女が幼い頃から繰り返し聴いたり読んだりした出来事が綴られているのに気付くのである。“...Rosamond was as beautiful as the day, Salome was as ugly as the night.”²⁾ と描写される継母 Salome と義娘の Rosamond。召使のようにこき使われ埃にまみれた姿になった Rosamond と、女主人として振舞う Salome のこの 2 人の関係は、「シンデレラ」を思い起こさせ、また、Natchez Trace 沿いで、盗賊 Jamie Lockhart に身

ぐる剥がされ、金髪を巻き付けて帰ってくる Rosamond の姿は「がちょう娘」と重なる。Jamie Lockhart の隠れ家で、家の掃除、料理をして盗賊たちの帰りを待つ Rosamond は、「白雪姫と七人の小人」の白雪姫を、Clement と貧欲な Salome の夫婦の会話は、“You’ll be reminded of a story in Grimm, ‘The Fisherman and His Wife’³⁾” と Welty が語るように、「漁師とその妻」と結び付き、さらに美しいけれど嘘つきの Rosamond が Jamie に魅せられて、彼の妻に相応しい貴婦人になっていく姿は、Shakespeare の「じゃじゃ馬ならし」の Katherine と重複する。Welty は、読者によく知った物語を思い起こさせるばかりでなく、タイトルにも暗示しているように、Washington Irving の “Story of the Young Robber” を説話に組み入れている。

様々な物語が含まれていながら、話の筋がスムーズに展開しているため、読者は一つ一つの物語の記憶を辿り確認しながら、読み進んでいく。舞台を歴史性に富む南部に置き、しかも、登場人物が幾つもの顔をもっているため、簡単なプロットのおとぎ話と感じていた *The Robber Bridegroom* が、実際には難解な小説になっていることがわかる。

小論では、物語の最後まで登場し、話の担い手である Clement, Lockhart, Clement の 3 人の姿を分析し、彼等の成長する姿、そして役割の中から、Welty が読者や自分自身に問いかけた“南部の姿”を考察していきたい。

III

It was the close of day when a boat touched Rodney’s Landing on the Mississippi River and Clement Musgrove, an innocent planter, with a bag of gold and many presents, disembarked. (p. 1.)

Rodney, Mississippi River という地方を背景に Clement Musgrove は “an innocent planter” として姿を現し、そして作品の最後まで依然として “innocent” と形容されている。

But Clement Musgrove was a man who could have walked the streets of Bagdad without sending a second glance overhead at the Magic Carpet, or heard the tambourines of the angels in Paradise without dancing a step, or had his choice of the fruits of the Garden of Eden without making up his mind. For he was an innocent of the wilderness, and a planter of Rodney’s Landing, and this was his good. (p. 182.)

魔法の絨毯を見ても気に留めず、エデンの園にいてもその禁断の果実を採ろうとも考えない Clement の姿は、作品の冒頭の彼の姿と全く変わらず、また、彼の持ち物 “a bag of money” (p. 182.) にも変化がない。これは、彼がいかなる事柄にも決して変わらない人物としての役割が課せられていることであり、Welty もそれを強調しているように思われる。

Rodney の宿屋で Clement は Jamie Lockhart に身の上ばなしをする。彼は Amalie という美しい妻を持ち、男の子と女の子の双子に恵まれた。妻と子供達を連れて、Kentucky Thomas とその妻 Salome と共に、彼の言う “the journey down” の旅にでかける。この時代の人が皆そうであったように、Clement も “pioneer” の波に押されていたのである。そして、彼等はインディアンに囲まれ、お金を取られ、息子は煮えたぎった油壺の中に落とされて殺され、妻はインディアンのものになるのを嫌い、Clement の目の前で死んだ。あとには彼と娘 Rosamond、そして Salome が残された。Clement は、彼の後妻になった Salome について、“From the first, Salome turned her eyes upon me with less question than demand, and that is the most impoverished gaze in the world.” (p. 24.) と Jamie に話しているが、妻をなくした直後にもかかわらず、彼が Salome の事を実に冷静に、客観的に判断しているのにも驚くが、彼の観察通りにしたたかな Salome は、Clement と結婚し、裕福な生活が送れるようになった時でも、彼女の欲望は果てしなく大きくなっていく。

“Next year, we must cut down more of the forest, and stretch away the fields until we grow twice as much of everything. Twice as much indigo, twice as much cotton, twice as much tabacco. For the land is there for the taking, and I say, if it can be taken, take it.” (p. 99.)

“Never, until we have got rid of this house which is little better than a Kentuchian’s cabin, with its puncheon floor, and can live in a mansion at least five stories high, with an observatory of the river on top of that, with twenty-two Corinthian columns to hold up the roof.” (p. 100.)

しかし Clement は、“My poor wife, you are ahead of yourself.” (p. 100) と言うだけでそれ以上 Salome に反発することも彼女を非難し従わせる事もできない。また、娘が盗賊に奪われても結局自力で彼女を見つけ出すことも救出する事もできず、“innocent like Don Quixote.”⁴⁾ と評されてしまう。娘の行動に対しても無力で、前妻の時と同じく妻 Salome がインディアンの部落で死ぬのを見とり、そして一人生き残るのである。

IV

Jamie Lockhart の嘘は Rosamond と異なり、明らかに目的を達するための手段として用いられた。また、彼は作品の中に登場したときから2つの顔をもっている。Clement の命を助け、紳士として彼の家を訪問する Jamie と、毒汁を顔に塗り、血も涙もない略奪をする盗賊の Jamie。彼のこの2つの顔は、顔に塗られた毒汁の有無で分けられるのである。Jamie が毒汁を顔に塗って盗賊に変身する事について、Welty が “conventional in Mississippi history.” であり、“Ban-

mits, adventurers, lovers and gods have the disguise in common”⁵⁾と述べているように、盗賊には変装が、Jamie には毒汁が不可欠な要素なのである。

Jamie がこうして2つの顔をもって生活するには理由があり、“Take first and ask afterward.” (p. 69.) “Who followeth not up his own work will fail” (p. 86) という Jamie のモットーは、彼の生きる目標である裕福な商人への最短距離であり、自分のモットーを忠実に実行することによって、確実に自分の夢は近付いて来ると確信しているから、その為自分が盗賊になることは、正当な事であると彼は信じている一方、Rosamond は紳士 Jamie Lockhart ではなく、毒汁をつけた盗賊 Jamie Lockhart に魅了され、変装した Jamie だけを愛する事で満足する。

Clement の家で会った薄汚い娘が、隠れ家に一緒に暮らしている娘と同一人物であると気付かない Jamie と、父親の信頼する Jamie Lockhart を自分の愛する盗賊 Jamie と同一化できない Rosamond の2人の認識のずれが、彼等の未来と宿命を暗示しているように思われる。

Jamie は夢と言うより信念とでも言うべき理想の未来像をもっている。

“The wife of a successful bandit should be a lady fit to wear fine dresses and jewels, and present an appearance to the world when we go to New Orleans, and make the rest rave with their jealousy...” (pp. 73–74.)

...it is a fact that in his heart Jamie carried nothing less than a dream of true love—something of gossamer and roses, though on this topic he never held conversation with himself, or let the information pass to a soul. And being a man of enterprise in everything, he had collected, whenever it happened to be convenient, numbers of clothes and jewels for this very unknown, that would deck a queen and he missed if a queen left them off. But as for finding this dream on earth, that Jamie was saving until the last, and he had done no work on.... (p. 74.)

Jamie のこの信念は、決して他人には話されず、また細部にわたり厳しい条件を伴う。この為に、善と悪とを識別することも無視される。一方、Rosamond は、Jamie への愛情が増すにつれて、Jamie の本当の顔を見たいと言う衝動にかられ、夜ごとに彼に毒汁を拭き取ってほしいと懇願するが、彼はいつも簡単に拒絶してしまうが、ついには Rosamond に、顔の毒汁を拭き取られてしまう。

V

“...Rosamond is a romantic girl, not a wicked one, and the lies she’s given to telling are simply a Rodney girl’s daydreams, not intended to do any harm....”⁶⁾

この様に、Welty は Rosamond を無垢な夢見る少女 “a romantic girl” として描いている。

“Rosamond was truly a beautiful golden-haired girl, locked in the room by her stepmother for singing, and still singing on, because it passed the time away better than anything else.” (p. 32.)

継母と虐待される金髪の美少女は、白雪姫、シンデレラ、鉢かづき姫など、世界共通のお伽話の典型的なパターンである。ここで読者は、継母が悪、娘が善という固定観念を持つと同時に、二つのトリックに気付く。すなわち、物語の常套手段である、完全無欠に見える人物のアキレス腱の欠点と、キリスト教モラルへのアレゴリーである。すなわち、Welty は、Rosamond にも意図的でない嘘をつくというアキレス腱的な欠点を与えている。彼女がいったん口を開くと、“the lies would simply fall out like diamonds and pearls.” (p. 39.) 嘘が口から流れ出てくる。

Rosamond が Clement の留守中の出来事を彼に話す場面がある。

“Oh, every day I go to the farthest edge of the indigo field, on the other side of the woods, and gather the herbs that grow there,” said Rosamond, “for my stepmother will have no other kind. And today a little old panther came out from behind a holly tree and rubbed up against my side. I took him in my arms, to see what he would do, and he gave me a little purr. Just then the mother panther let go from the tree above my head, and down she lit on her feet, stirring up the leaves like the gold organ in the Rodney church. She was ten feet long and she must have been nine feet high when her hair started rising, for she reached away over my head when I looked her up and down. The first thing I knew she took me up in her teeth, but very easy, by the sash, and carried me all the way home through the woods before she set me down at the gate. She swung me hard, and I knew she meant it for a lesson, and so I came away from her, and here I am, but the whole time I never dropped the leaf of one herb.” (pp. 37–38.)

パンサーの子供と戯れる Rosamond のもとには母親のパンサーが現れ、彼女に “a lesson” と与えたというこの作り話は、お伽話のようにハッピーエンドで終わらない。継母と閉鎖的な世界に住む Rosamond にとって、唯一許されている自由は、自分の頭の中で想像の世界をつくり、幾つかの試練をヒロインの自分に与え、そしてそれを乗り越えていく事である。宝石のように流れ出る嘘話は、作品の中で劇中劇のように織り込まれている。

こうした毎日を送る Rosamond は、Natchez Trace で Jamie Lockhart と出会う。“Good Morning”

(p. 46.) と Jamie に声をかけられた Rosamond は、予期せぬ出来事に驚き戸惑うが、次の会話ではすっかり彼女はお伽話のヒロインになりきってしまう。

“All my dresses are like this one,” said Rosamond. “Only this is the worst of the lot, and that is why I don’t care what happens to it.” (p. 46.)

ドレス、ペティコート、下着と次々にはぎ取られていく絶対絶命の状態の中でも、彼女はか弱き女性を振る舞いながらも次々と Jamie に対応していくのである。彼女の想像の世界ではこのような事件がいや、どのような事がおきても何ら不思議ではなく、しかもその対処の仕方を Rosamond は身に付けている。“Were you born of a woman? For the sake of your poor mother, who may be dead in her grave, like mine, I pray you to lebave me with my underbody.” (pp. 48–49.) 非常に大人びた、盗賊をたしなめるような口調で受け答えし、そして Jamie に簡単にかわされると、

“You may not know. . .that I have a father who has killed a hundred Indians and twenty bandits as well, and seven brothers that are all in hearty health. They will come after you for this, you may be sure, and hang you to a tree before you are an hour away.” (p. 49.)

今度は完全な作り話の、つまり自分の妄想のお伽話の主人公になりきり相手を威圧しようとする。身ぐるみはぎ取られた後でさえも、彼女は自分の一糸まとわぬ姿がどのように見えるかを考えながら、Jamie が短剣で殺したほうが良いか、裸で家に帰るほうが良いかと尋ねるとすぐに “Why, sir, life is sweet,” (p. 50.) とさりと答えるのである。この瞬間、彼女は幻想の世界から現実の世界に戻ってくるのである。

Jamie とのこの出会いを、Rosamond はほぼありのままに父親に話す。さらにミルク絞りの後、Jamie を求めるかのように森の中に入る。Jamie に最後に残ったものを奪われた後、絞ったミルクの事を継母に聞かれても、ただ “I dare say the red horse drank it up.” (p. 66.) と言葉少なにいうだけであった。Jamie との出会いで Rosamond の態度は変化し、彼女が “the spoiled daughter of a rich planter” と “the self-sacrificing lover of bandit of the woods”⁷⁾ という 2 つの顔を持つ女性になる。

Jamie の隠れ家に住み、両親に会いに帰ってきた Rosamond の姿は、以前の彼女の姿と嘘をつくことも含めてそれ程大きく違う所はない。しかし、Jamie とその仲間の世話をして生活する彼女は全く別人のようである。

In the daytime, in the silence of noon, while they were all away, she cooked and washed and baked and scrubbed, . . .She washed the robbers’

shirts till she wore them out with her washing, ... she spun and manufactured all they would need for the cold winter coming. (p. 83.)

家の中を片付け、食事の支度をして Rosamond は Jamie の帰りだけを待ちわびて生活した。Jamie と触れあう事だけを喜びとし、彼が略奪や強盗をやっていることを感じながらもそれ以上知りたいとは思わなかった。ただ、彼の顔に塗られた苺汁だけが気になる問題であった。夢見るロマンティックな少女 Rosamond は、夢物語では無く、本当の自分の心をゆるがす夫の正体、素顔を見たいという現実的な問題を解決するの必要を感じたのである。とうとう苺汁を拭き取り彼の素顔を見る。

Up she got and away she crept, and made up the brew which would wipe away the stains. She took Jamie's head on her lap while he still slept and dreamed, and held up the lighted candle to see by, and set to her task. ...

Jamie Lockhart opened his eyes and looked at her. ...

"You are Jamie Lockhart!" she said.

"And you are Clement Musgrove's silly daughter!" said he. (p. 134.)

Jamie の素顔を見て、彼女は、"the stirring within her that sent her a fresh piece of news" (p. 135.) を感じる。一方、Jamie は、Rosamond が Clement の娘である事を知ると同時に、彼の持つ2つの顔を失い、同時に、自分のモットーを果たす為に Rosamond が必要な存在でないと感じたのである。己の意のままに何ごとも奪いかつ手にいれる為につき進んで生きてきた Jamie のプライドは、何かを失う自分を許さない。

"Good-by," she said. "For you did not trust me, and did not love me, for you wanted only to know who I am. Now I cannot stay in the house with you."

(p. 135.)

Jamie は Rosamond を残して姿を消す。そして、小説もこの2人の別れと同様に、"And finally a cloud went over the moon, and was dark night." (p. 135.) と暗く、悲観的な雰囲気覆われるが、Jamie が去った後、彼女は現実を踏まえながら未来を求める女性へと変わっていくのである。

Jamie の後を追って Rosamond は窓によじ登るが、躓いて土埃の中に落ちたまま、朝を迎える。彼女は、"My husband was a robber and not a bridegroom." と叫び、"And if I had no faith, he had little honor, to deprive a woman of giving her love freely. (p. 146.) と心の中で自分の気持ちを整理しようと試み、"if I could only find my husband, I would tell him that he has broken my heart." (p. 146.) と意気込み、夫を見付ける旅に出ようとするが、その途中、インディア

ンに連れ去られ小屋に閉じ込められてしまう。惨めさを実感し、二度と夫に会えないという寂しさと昔の生活を懐しく思い返している今の自分の状況に気付き、Rosamond はここから逃げ出す事だけに心を集中する。Rosamond は小屋の側を通りかかった Goat に “Let me out” (p. 151.) と懇願する。何かくれるなら助けてなるという Goat に、Rosamond は Jamie や盗賊が皆死んだら一緒に暮らし、奥さんになると約束して自由の身になって森へと逃げ込む。

Rosamond は “Have you seen Jamie Lockhart?” (p. 168.) と尋ねながら Old Natchez Trace に沿って歩き続け郵便配達人に出会い、彼から “Jamie Lockhart the ghost?” (p. 174.) と言われ、話を聞く事になる。彼は自分が Jamie を殺したこと、そして “...it was going to the New Orleans port for the purpose of taking a boat.” (p. 177.) と Rosamond に話すと、彼女は “...For I have a message for Jamie Lockhart from another world.” (p. 177.) と未来からの知らせ、双子の親になることを告げる。“未来からの知らせ” と聞いたこの郵便配達人は、Rosamond を助けることになり、さらに自分が Mink Fink である事をあかす。

Mink Fink は、“the legendary fold hero”⁸⁾ Welty が話すように、彼は Mississippi 州の射撃の名人で船乗りである。実物よりも滑稽に描かれているが、彼のこのコミカルな姿は、インディアンの娘の虐殺、Salome の死など残酷で残忍な事件が続く折のカタルシスとして牧歌的な雰囲気をもたらすが、これは Mink Fink を戯化したことによるばかりでなく Rosamond の持つ特性によるものである。

子供を身籠もり、その父親の行方を探しにいくその姿は、William Faulkner の *Light in August* のヒロイン Lena Grove の姿を彷彿とさせる。Lena Grove は、母の強さ、たくましさをもっていると評されるが、母になったその時からその使命を遂行すぐ力を得、それでいて少女の頃のような素朴さ、明るさを兼ね備えている。母となる Rosamond は、Fink の言葉でさらなる力を得て、New Orleans の港へと直行する。

...and at last she came to where a crowd of gentlemen and sailors were embarking on a great black ship going to Zanzibar. And sure enough, there in the middle, and taller than all the rest like a cornstalk in the cottonfield, was Jamie Lockhart, waving good-by to the shore. (p. 181.)

“Jamie Lockhart!” “I came and found you!” と叫ぶ Rosamond を見つけた Jamie は、素早く彼女を牧師の所に連れていき結婚してしまう。一瞬の内に、Jamie Lockhart と Rosamond の話は合流し、そして最後に Clement がそれに加わることになる。

...she told him that Jamie Lockhart was now no longer a bandit but a gentleman of the world in New Orleans, ...a rich merchant in fact. ...They were the parents of beautiful twins, ...they lived in a beautiful house marble and cypress wood on the shores of Lake Pontchartrain, with a hundred slaves,

and often went boating with other merchants and their wives, the ladies reclining under a blue silk canopy; (pp. 183–84.)

と Rosamond は父に自分の幸せ様子を話し、Clement は Jamie にも再会し、こうして Clement、Rosamond、そして Jamie が初めて一堂に会する。

VI

今まで述べてきたように、3人のストーリーは重なりあったりまたは離れたり展開してきたが、この3人の話が途中で分離展開するとき、Welty は、Washington Irving の短編 “Story of the Young Robber” をほぼ同じ形で導入している。この話の中で最も残酷な場面を他の作家から導入するという Welty のアイデアで、この残酷な話を原因としてインディアンとの関わりを持たせながら、各々の登場人物の運命を定めていく。そして、Rosamond の嘘話は Irving の短編小説と同様、作品の中で新しい物語をつくりだし、Clement、Salome という聴衆を得て劇中劇のように、話の発展性を促す役割をなしている。

Jamie は、二つの顔を巧みに使いこなして裕福な商人へと進んでいく。途中、将来の伴侶となり、自分の夢を完成させうる力や魅力を持つ Rosamond を、その恰好ゆえに認識する事ができない事があったが、これについて Jamie は自分で次のように理由づけを行っている。“it was either love or business that traveled on his mind, never both at once, and this night it was business.” (p. 69.) business と love を別のものと考え、それに従って行動した Jamie。二つの顔を巧みに使いわけながらもついには、Rosamond に正体を見破られ、のちに彼女と再会し結婚した後、彼は自分の成功を楽しみ、物事をあらゆる面から見る力を備える商人になる。これは、古き良き時代から商人の横行する時代へと移行し、資本主義の波が押し寄せてきた南部の姿をあらわしている。

Rosamond は、理想通り成功した商人 Jamie の妻の姿に変わり、双子にも恵まれる。順風万満帆の生活を送り、これからも送れるであろう Rosamond と Jamie は、古い世界から脱皮した新しい南部社会に属する人物と考えられる。一方、依然として “innocent” な人物像として描写される Clement は、2人の妻を同じような状況で失うように、過去を繰り返し、“過去” を意識し、過去を引きずっている。しかし、彼はまた、人の善し悪しを判断するモラルの基準を身に付けていて、妻の Salome や Rodney の宿屋の主人を彼なりの判断力で見極めている。彼は、盗賊のもとに走った娘 Rosamond に話をする。

“If being a bandit were his breadth and scope. I should find him and kill him for sure, . . . “But since in addition he loves my daughter, he must be not the one man, but two, and I should be afraid of killing the second. For all things are double, and this should keep up from taking liberties with the our-

side world, and acting too quickly to finish things off. All things are divided in half—night and day, the soul and body, and sorrow and joy and youth and age, and sometimes I wonder if even my own wife has not been the one person all the time. . . .” (p. 126.)

Clement は自分の過去を通して、この世のもつ二面性——神話の要素の一つである antithesis の叙述——を説き、その理論にあてはめ Jamie を分析してしまう。これは Clement が “moral and aesthetic framework”⁹⁾ となっている証しである。さらに彼は、“But the time of cunning has come.” (p. 142.) と世の中の変化、資本主義の波を鋭く予見する。

アメリカ文学の歴史の中で、寓話に影響を受けた作家、又は作品は数多い。Nathaniel Hawthorne は、幼年時代から親しんできた Homer, Miguel de Cervantes, John Milton そしてそれらの寓話の大家らを最も注目すべき作家としてあげている。物語の範囲は、突飛な空想物から細かい日常生活の出来事にまで及んでおり、その中で、神格化された英雄を扱ったり、勧善懲悪的な説教的要素を持っている。いわゆる American Renaissance (1821–1860) を迎え、アメリカ的ユーモアが口承物語と重なり、現代に受け継がれた「ほら話」に至る。Mike Fink の逸話はまさしくその代表的なものといえよう。現実的なものと有り得ない物の間に生じる不協和音を和らげる「ほら話」の裏に、その地方色が濃くでている。南西部のユーモアを熟知していた南部出身の Joel Chandler Harris (1848–1908) は、*Uncle Remus* (1880) の中で、農園主を穏やかに描き、主人と奴隷の間に友好的な関係があったとしている。現実と非現実の境の曖昧さは、地方色が濃く反映されていることにより許される。一方、南部の代表的な作家 William Faulkner は、*The Sound and the Fury* において、時間を曖昧にし、三人の語り手による断片的な出来事により、読書側にそれらを組み立てさせることに成功している。こうした二人の南部作家のあとを受けて、Welty は、地方色とユーモア、諧謔性を備えながら、現実と非現実、事実と嘘などの二面性に焦点をあて、読者にそれを気付かせることを試みて、この世の裏表、撞着、矛盾を Clement を基準とした物指しで Rosamond と Jamie の生きざまを計測、表現している。“When loss is as impermanent as gain, history assumes a comic shape”¹⁰⁾ とするならば、南部を牧歌的な雰囲気の中で、残酷でそれでいて明るくコミカルに描く事に成功したと言えよう。当時は廃れ荒れはて忘れられていた Natchez Trace や Rodney を舞台にして書き始めた Welty は深く“南部”の歴史を意識し、新しい形容で南部の未来を表現したといえよう。このような点から考察すると、*The Robber Bridegroom* は、その後の Welty の歴史的寓話作品の起点となりうる作品であるといえよう。そして、この南部の歴史に培われた彼女の想い、そして憂いは、さらに彼女の作品の中で新しい形となって表現されていくことであろう。

注

1) Peggy W. Prenshaw (ed.). *More Conversation with Eudora Welty* (Jackson: Univ. Press of MS, 1996), p. 125.

2) Eudora Welty, *The Robber Bridegroom* in *The Complete Works of Eudora Welty*, I. Tanabe (ed.), (Kyoto: Rinsen Book Co., 1988), p. 33.

この作品からの引用及び作品への言及は、全てこの版に基づくものとし、以後、引用箇所は括弧内の頁数を示す。

3) Eudora Welty, *The Eye of the Story: Selected Essays and Reviews*, (London: Vintage Books, 1980), p. 304.

4) Michael Kreyling, "The Robber Bridegroom and the Pastoral Dream" in *Eudora Welty*, H. Bloom (ed.), (New York: Chelsea House Publishers, 1986), p. 141.

5) Eudora Welty, *The Eye of the Story*, p. 308.

6) *Ibid.*, p. 305.

7) Barbara H. Carson, "Eudora Welty's Dance with Darkness: *The Robber Bridegroom*" *Southern Literary Journal*, Spring 22(2) (1988), p. 59.

8) Eudora Welty, *The Eye of the Story*, p. 302.

9) Ellen L. Walker and G. Seaman, "The Robber Bridegroom as a Capitalist Fable," *SoQ*, Summer 26(4) (1988), p. 65.

10) *Ibid.*, p. 67.